

SDGsの理解深化に向けた環境教育の試みと課題 —土曜チャレンジ・アップ教室2021の活動を基に—

味岡 ゆい*

Problem and challenges of Environmental Education to deepening of understanding SDGs: Based on practical examples at the Saturday Challenge-up Lesson 2021

AJIOKA Yui

要 約

小学校では2020年度より、中学校では2021年度より、新しい学習指導要領が実施され始めた。学習指導要領の前文には、「持続可能な社会の創り手」の語句が示され、これは教育現場におけるSDGs達成のための人材の育成が求められていると考えられた。本稿では、SDGsの環境に関する目標に着目し、SDGsへの理解深化に向けた環境教育の試みとして、土曜チャレンジ・アップ教室2021の活動の一部を紹介する。また活動を基に環境教育の3つの観点から、今後の課題についてまとめる。

キーワード：食品ロス、海洋汚染、学生ボランティア

1 はじめに

小学校では2020年度より、中学校では2021年度より、新しい学習指導要領が実施され、前文には、「一人一人の児童（生徒）が（略）持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。」（文部科学省2017）と示された。この「持続可能な社会」は、SDGs（持続可能な開発目標：Sustainable Development Goalsの略称）やESD（持続可能な開発のための教育；Education for Sustainable Development）による影響が大きいと考えられる。

SDGsとは、2015年国連サミットで採択された2030年までに世界で目指す国際目標である。地球上の誰一人取り残さないことを誓い、経済、社会、環境など広範囲な問題に対して17の目標及び169の

ターゲットにより構成されている（図1）。ESDは、このSDGsの目標4「すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯教育の機会を促進する」のターゲット4.7に明記されているが、ターゲットの1つとしてだけでなく、SDGs17全ての目標の実現に寄与する持続可能な社会の創り手を育む教育とされる。池田（2018）は「手法」としてのESD・環境教育（ESDの1つ）と「目標」としてのSDGsを教育・学習（学修）に組み入れることで、2030年に向けた持続可能な社会づくりにおいて不可欠な「人材（人財）」の育成が飛躍的に進むことが期待される」と述べている。

本稿では、SDGsの環境に関する目標に着目し、SDGsへの理解深化に向けた環境教育の試みとして、土曜チャレンジ・アップ教室2021の活動の一部を紹介する。また活動を基に環境教育の3つの観点から、今後の課題についてまとめる。

* 中部大学現代教育学部現代教育学科



図 1. SDGs17 の目標

2 SDGs達成に向けた環境教育

2-1 環境教育のねらい

「環境教育指導資料幼稚園・小学校編（国立教育政策研究所教育課程研究センター 2014）」では、小学校における環境教育のねらいを、①環境に対する豊かな感受性の育成、②環境に関する見方や考え方の育成、③環境に働きかける実践力の育成の3つにまとめている。また、山本（2020）は環境教育の段階として、「気づき」「理解」「行動」の3つの段階をあげており、気づきを土台として、それを基に理解が進み、理解することによって行動がおきる三角形のピラミッド型であると述べている。水山（2013）は、気づくこととわかること、わかることと行動することの間には、大きな溝があり、学習を進めるにあたって、このギャップに十分に配慮した工夫が必要であると述べている。さらに学習者同士が協働し、振り返り、分かち合えるように作業的・体験的な要素を十分加えるなどの工夫が重要であると述べている（水山2013）。

このことから、環境教育においては、環境問題に対する「興味や関心・気づき」を得た上で、「見方

や考え方・理解」を深化させ、最後に「振り返り・行動」へと3段階による働きかけが必要であることがわかった。以下では、この段階に沿って活動を進めた。

2-2 土曜チャレンジ・アップ教室における活動内容

土曜チャレンジ・アップ教室とは、愛知県春日井市の公立小学校にて、土曜日午前を実施している活動である。児童らが小学校で学習した内容を活かした企画を設定し、生活や現象などと関連させた科学学習の発展的応用を通して、児童の探求心や発想力など視野の広がりや養うことを目指している。また、制作物を通して児童に「楽しくてちょっと学べる土曜日学習」を提供する活動である。立案・運営は学生らが行い、2021年度は、16テーマを計画した。16テーマのうち、SDGsの目標と関連させ環境問題の理解深化を目指した活動2つを紹介する。

（1）SDGs目標12の理解深化活動

【SDGs目標と活動との関連】本活動では目標12の「つくる責任つかう責任」に焦点をあて、資源をつ

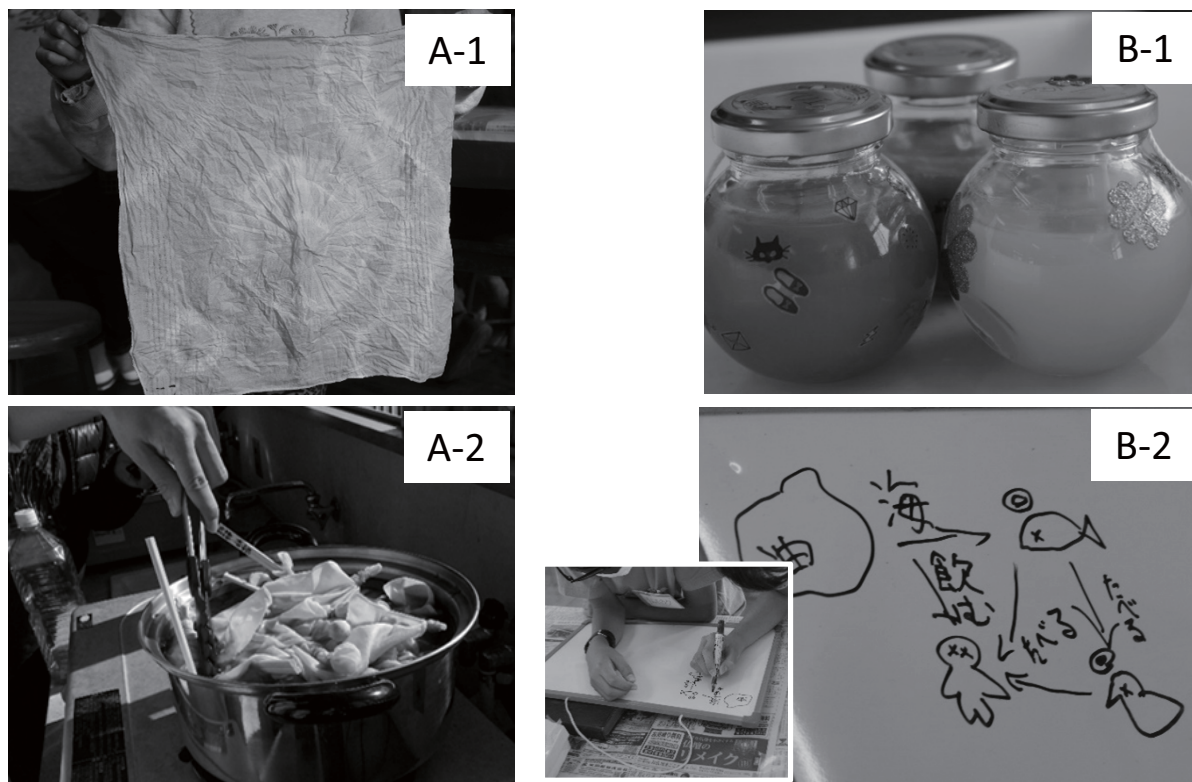


図2. 活動の様子

A：目標12に関連した活動

A-1) 草木染めのハンカチ作り A-2) 染色中の様子

B：目標14に関連した活動

B-1) 廃油を利用したキャンドル作り B-2) グループディスカッションの様子

かう側の責任として、ゴミの削減や食品ロスについて理解を深めた。

【活動の詳細】家庭で排出するゴミの種類について気づきを得たのち、体験活動として生ゴミ（玉ねぎの皮）を利用した草木染めの制作を通して、ゴミの資源としての活用（3R）について考えを深めた。また、食品ロスのためにゴミの削減について自分たちができることをグループで話し合い、発表を通して理解を深めた（図2-A）。

(2) SDGs目標14の理解深化活動

【SDGs目標と活動との関連】本活動では目標14の「海の豊かさを守ろう」に焦点をあて、私たちの生活が河川を通じて海と海の資源に影響及ぼしていることについて、理解を深めた。

【活動の詳細】海面に浮いた油や油まみれの水鳥の写真を見童らに示し、私たちの生活は海洋とつながっており、生活排水として海や海の生物へ影響を及ぼしていることに気づきを得させた。その後、体

験活動として廃油を利用したキャンドルの製作を通して、廃棄せずに再利用できること、また、生活排水への影響を軽減させる処理方法など自分たちができることをグループで話し合い、発表を通して理解を深めた（図2-B）。

3 おわりに

SDGsと関連させた活動について、環境教育における「興味や関心・気づき」「見方や考え方・理解」「振り返り・行動」の3段階に沿った活動を紹介した。しかし、環境問題はSDGsが示す単体の目標やターゲットから成り立つものではなく、複数の多角的な観点が絡み合って存在する。例えば、活動例2は目標14「海の豊かさを守ろう」に着目したが、廃油キャンドルは目標7「エネルギーをみんなに そしてクリーン」のエコ資源や目標12「つくる責任つかう責任」の廃棄物の再利用の面からも、環境問題に対する個人の対策として捉えることもできる。国立

教育政策研究所教育課程研究センター(2014)は「環境に関する見方や考え方の育成」として、身近な環境や様々な自然、社会の事物・現象に中からの自ら問題を見つけて解決していく問題解決の能力とその過程を通して獲得することができる知識や技能を身に付けることによって、環境に関して持続可能な社会の構築につながる見方や考え方が育むと述べている。環境に関して多様な観点から「見方や考え方」を示すことでより深化するものと考えられるため、今後検討していきたいと思う。

参考・引用文献

池田満之(2018) SDGs達成に向けたESD・環境教育に関する考察と提言、中国学園紀要第17巻、pp. 149-158

国立教育政策研究所教育課程研究センター(2014) 環境教育指導資料(幼稚園・小学校編)、p. 33、https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/kankyo_k_n_eb.pdf (2022年3月15日確認)

水山光春(2013) 社会認識としての環境教育、よくわかる環境教育、ミネルヴァ書房、pp. 12-13

文部科学省(2017) 小学校学習指導要領、https://www.mext.go.jp/content/1413522_001.pdf (2022年3月15日確認)

文部科学省(2017) 中学校学習指導要領、https://www.mext.go.jp/content/1413522_002.pdf (2022年3月15日確認)

山本素世(2020) 環境教育プログラムの活用とSDGsに関する一考察—小学校、大学での実践事例をもとにして—、奈良大学紀要第48号、pp. 131-143

受付日 2022年3月15日

受理日 2022年5月11日